社会福祉法人 さぽうと 21
Support21 Social Welfare Foundation

Support21

Vol.75 2024.3

Newsletter

「子ども達のエンパワーメント」を願って　ーさぽうと21の学習支援事業ー

学習支援事業は、前身団体の設立から40年余り、多くのボランティアの方々の静かで熱い想いに支えられて展開してきました。「皆さんが日本社会で自立していくために、どうしたらお役に立てるだろう」と自問自答を繰り返しながら、日々活動を続けています。

2020～2022年度にかけて実施した「「一人も取り残さない」ための包括的学習支援展開事業」（公益財団法人日本国際交流センター（以下 JCIE）助成）の最終報告会では、2022年度に開始した「群馬県館林在住の「ロヒンギャ」難民二世に対するオンラインを活用した学習支援事業」（一般財団法人ファーストリテイリング財団（以下 FR 財団）助成）のコーディネーターである、ロヒンギャ難民のカディザ・ベゴムさんに、「学習支援事業」にかける想いを語って頂きました。その後行ったカディザさんへのインタビューの一部を紹介させて頂きます。

（字数の関係で一部変更あり。ホームページに全文掲載中。）

▶カディザさんが学習支援の活動を始めたきっかけは？

館林で訪ねたある家で、勉強机の上に封筒が置かれていて、開けてみたら提出期限が過ぎているお手紙でした。「お母さんにこれを見せたくないの？」と言ったら、「お母さんに見せても意味がない」とか言われたんですよ。小学校３年生だったんだけど。お母さんを頼りにしていない。それがきっかけで、何かしなければと思って、（群馬県）太田で活動していた方々に助けて頂いて、学習支援の活動を始めました。

▶同時に、母親達への日本語学習にも取り組むようになったんですね。何か変化がありましたか？

初めて女性達はゼロから言葉を学び、簡単な会話ができるようになって、夫に頼らなくなり、少しだけれど自分らしく生きていけるようになりました。やっぱりそれがすごーく変わったところ。でもね、変わってきたけど、それがぎゅうっと生活向上につながったかと言うとつながっていない。子ども達のエンパワーメントに繋がったかと言うとまだ繋がっていない。

▶「たてばやしオンライン学習支援教室」をどんな風に見ていますか？

低学年の子ども達が喜んで楽しんで勉強している。それは2，3年後、すごくいい勉強の習慣になるのかな。例えば高学年になってもあきらめない姿勢を作れるんじゃないかなと思うんですね。そして、日本人に認めてもらう。それはとても大事。「ここはわたしの居場所」だと思える。それがなければ、ずーっと外国人。「ここはわたしの居場所」、そう思った瞬間、この国への愛情も生まれる。私もあなたもお互いに受け入れて、初めて愛情を分かち合えるんです。

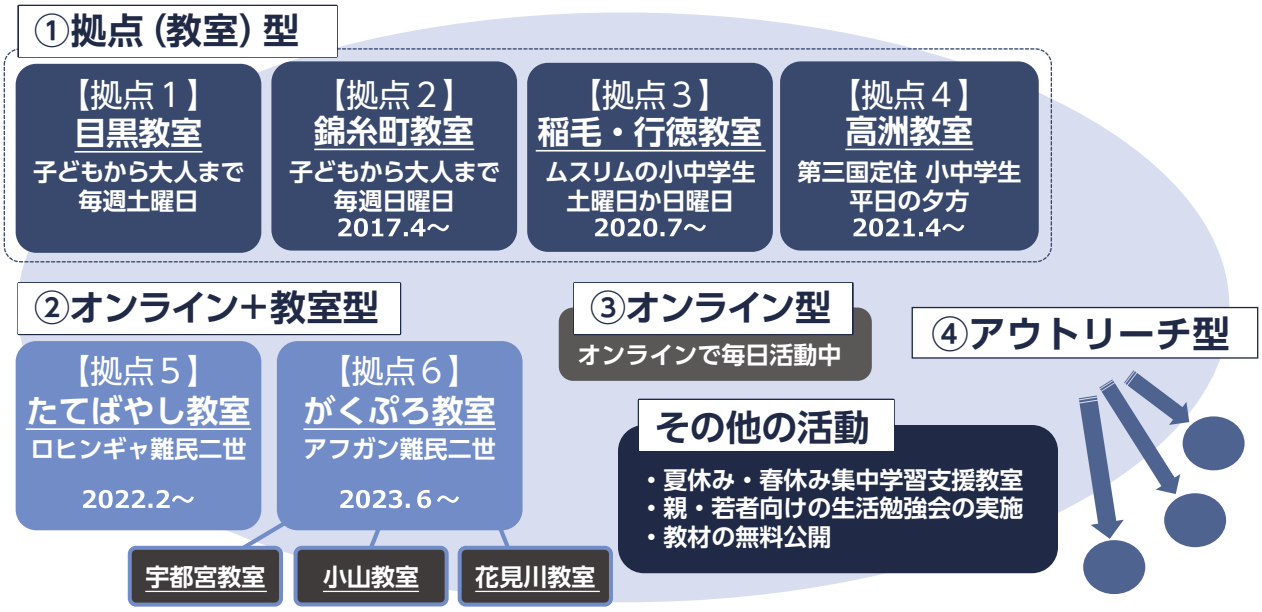
▶カディザさんの夢は？

まずは子ども達が大きな夢をもてるようになること。そして「わたしはできるよ」という自信を持てるようになること。夢の実現に向けてがんばっていけるようになること。それが当たり前の現実であってほしい。ロヒンギャの子ども達、本当に視野が狭いから、あまり大きい夢をもてなくなっています。親の状況、経済的な状況、社会的な地位とか、いろんなことが関係して、子ども達のエンパワーメントに影響を与えている。わたしの夢は、夢を叶えられない子どもが生まれないこと、そんな社会をつくることです。

館林の対面教室で

学ぶことで日本社会とつながる　ー2023年度の学習支援ー

さぽうと21の学習支援室（4タイプ）



さぽうと21の活動の根底には、「学ぶことで日本社会とつながる」という想い、期待、願いがあります。「伴走」「包括」「連携」をキーワードに、今年度も様々な助成金を頂いて、学習支援を展開してきました。現在は「拠点（教室）型」「オンライン＋教室型」「オンライン型」「アウトリーチ型」の活動を組み合わせて日本語･教科学習支援を行い、「夏休み・春休み集中学習支援教室」の開催（FR 財団助成）、親・若者向けの生活勉強会の実施、作成した教材の無料公開も継続しています。

大人達、若者達への日本語支援活動

目黒や錦糸町の教室には、子どもや大人の対面参加が増えてきました。加えて今年度は「難民・避難民等の日本語力・生活力・親力（おやりょく）向上応援プロジェクト」（東京都在住外国人支援事業助成）により、特に親を対象として、日本語支援＋勉強会を実施し、生活力・親力向上を目指しました。専門家から社会保障制度や教育資金などの話を聞き、必死にメモをとる親達の様子が印象的です。

また、「難民・避難民等の地域社会へのソフトランディングを支える日本語教育プログラム展開事業」（文化庁「生活者としての外国人」のための特定のニーズに対応した日本語教育事業助成）では、日本語教師の社会貢献活動の場「にほんごぷろぼの」を運営し、難民的背景をもつ方々が希望する時間帯に学習できる仕組みをつくりました。夜11時に元気に学習を終える大人達もいます。

子ども達への学習支援活動

2021年には、第三国定住難民として千葉市に住むこととなった小中学生を対象に、平日下校後に通える学習支援教室「楽校（らっこう）」を「千葉市高洲地区在住の第三国定住難民子弟に対する教育支援事業」（公益財団法人アジア福祉教育財団助成）としてスタートし、まもなく３年になります。参加している中学生がぽつりと「この場所がなかったら、私はどうなっていたんだろう」とつぶやいていたと、教室担当者から聞きました。多くの課題はありますが、子ども達は日々成長しています。この地域では、新たに来日した第三国定住の第12陣へのアフターケアプログラムとして、子ども・大人への日本語教育をアジア福祉教育財団の委託により、同財団の難民事業本部の下で実施しています。

2022年には、長年の課題であった、ロヒンギャ難民二世の小中学生を対象にした学習支援を、「オンライン上の学校」という形で実現しました。「群馬県館林在住の「ロヒンギャ」難民二世に対するオンラインを活用した学習支援事業」（FR 財団助成）は、オンラインをフル活用し、日本全国からのボランティアを動員する画期的な事業です。

そして2023年には、タリバン侵攻で日本に退避してきたアフガニスタン出身の小中学生を対象に「アフガニスタンから退避した小中高生のためのオンラインを活用した学習支援事業」（JCIE 助成）を開始しました。ご縁のあったアフガニスタン出身の子ども達は、日本語支援の必要性が高く、また、主に関東圏に散在していますが、栃木県（宇都宮、小山）千葉県（花見川）での対面教室も、毎週末開催できるまでになりました。

支援生からのメッセージ　“周囲の人々の支えになりたい”

2023年度支援生（坪井基金）

千代田 パウラ ミワさん（愛知教育大学　教育学部）

私はブラジルで生まれ、両親と姉と共に来日した日系ブラジル人です。大学では教育について学び、まもなく卒業を迎えます。４年間の大学生活を振り返ると、多くの学びと成長があったと感じます。その中で最も大きかったのは、「自分の周りの人々の助けになりたい」という人生の軸が出来たことです。

私の地元である愛知県豊田市には、私たちと同じ境遇の日系ブラジル人が多く暮らしています。姉から、勉強したくても来日したばかりで日本語がわからず、進学を諦めざるを得ない状況にいる中学生の話を聞きました。そこで、そういった子ども達の力になりたいと考え、姉と共に外国人児童の学習支援を行う団体「CONNECT」を立上げ、公的な施設を借りて、主に日本での勉強についていくための教科学習を行いました。また、市の補助金を得てキャリア講演会も行いました。そのきっかけは、大学の実習で母校の小学校を訪れた際、ある外国人児童の「どうせ僕は工場で働くから勉強しない」という言葉でした。私は改めて、勉強によって広がる将来の可能性を伝えることが大切だと感じ、団体や母校でもキャリア講演会を行いました。その結果、工場で働くしかないと言っていた児童が、講演会後には自分の将来の夢を語ってくれ、団体に参加する生徒も目標意識を持って勉強に取り組むようになりました。活動開始から４年が経ち、現在は総勢30名になりました。団体立上げのきっかけとなった中学生は春から第一志望の大学への進学が決まりました。自分たちの行動が、誰かの夢の手助けになったことを嬉しく思います。

団体の活動や大学の実習での経験から、自分の周りにいる、困難を抱える人々の助けになりたいという思いが生まれました。そして、思いを達成するには、地元の市役所で働くことが一番だと考え、就職活動を行いました。４月からは晴れて、市役所に勤めます。学業や就職活動、団体の活動に専念でき、人間として大きく成長できた４年間でした。家族や周りの友人、さぽうと21の皆様にお力添え頂いたおかげです。心より感謝申し上げます。

自分も誰かに助けられているということを忘れずに、自分の周りの人々の助けになることで還元していきます。

2024年度 坪井一郎・仁子 学生支援プログラム 支援生決定

当プログラム（通称：坪井基金）は東洋熱工業株式会社の創業者である故 坪井一郎様・仁子様ご夫妻のご遺贈を元に2005年に開始しました。新年度は大学３年次以上・大学院生の９名を支援する予定です。（ルーツはベトナム、ミャンマー、ブラジル、中国など７ヵ国。）

今年度はウクライナからの退避者の方も受け入れております。製造業を支える鋳造技術や、半導体等の性能向上、量子コンピュータの開発といった理系分野の他、外国人の子どもの学習支援を専攻している学生もいます。年に１回（11月頃）、研究成果の発表や活動報告をする「支援生報告会」を開催し、来場者の方々との交流会も行います。時期が決定次第、ホームページ等でご案内いたします。

2023年11月の報告会でのグループ発表

第17回かめのり賞 活動奨励金を受領しました

日本とアジア・オセアニア地域の若い世代の交流・人材育成を通じて、相互理解と友好関係の推進に取り組む公益財団法人かめのり財団より、当会の支援事業に対する活動奨励金（30万円）を１月に受領いたしました。この奨励金は「第17回かめのり賞」への応募によるものです。これからも学習支援と就学支援、その基盤となる相談事業の充実に向けて、さらなる努力を積み重ねてまいります。

アフガニスタンから退避した若者たちの日本語学校通学にご協力ください！

2023年７月より、学校法人ISI学園(東京都豊島区 荻野 正昭理事長)と協働で、アフガニスタンから退避した方々の日本語学校通学を支援しています。

ISIは彼らを無償で受け入れてくださり、当会は交通費の支援の他、生活や通学に関する相談に対応するなどの伴走支援を続けています。

授業の様子

現在８名が通学しています。学期ごとに個人面談を行い、入学から半年後の今年１月にも、日本語習得や家族の暮らしの状況、今後の希望などについて一緒に考える機会を設けました。今回、３ヵ月ぶりに話をした18歳のI君、驚くほど日本語が上手になっていました。印象に残る面談でした。

I君、日本語、上手になったねえ。
―ありがとうございます！
ちょっと疲れているようだけど・・・。
―１月から週に５回、夜勤の仕事を始めました。
勉強も大切な時なのに、どうして夜勤の仕事を始めたんですか。
―もともと僕は学校の紹介でコンビニでバイトして、一緒に通学している姉２人は別の所で働いていました。でも、姉たちがシフトを減らされてしまったので、自分が父を助けて、家族を支えなくてはいけなくなりました。
仕事と学校の両立は大変だと思うけれど・・・。
―夜勤を終えて家に帰るのは朝６時ごろ。その後、３～４時間眠って、家を出ます。学校まで電車で１時間半かかるので、午後１時のクラスに遅れないように早めに出ることにしています。
宿題はきちんとできていますか？
―はい、朝早く起きて、家を出る前に終わらせるようにしています。どうしても間に合わない時は通学の電車の中で終わらせています。

印象に残ったのは、彼の状況の大変さではありません。家族を支えるという重圧がますます重くなっているにもかかわらず、彼の表情がとても生き生きとしていたのです。日本語学校という、日本で初めて見つけた「自身の居場所」を、今後自立するための「一歩目の場所」として大切にしていることが伝わってくる、そんな表情でした。何とかあと１年３ヵ月通い続けてほしいと切に願っています。ISIの方も「大変な状況の中、それでも日々の学習に真摯に向き合う姿を見て、心から応援したいと感じています。４月以降も現在の学生に加え、新たに学生を迎え入れる形で継続的に支援したいです」と仰っています。

しかしながら、栃木や千葉などからの通学にかかる交通費は高く、当会も支援の継続が困難な状況です。今後も彼らが安定して学べるよう、ご寄付を募っております。

2024年度 年会費の納入について

いつもご支援いただき、改めて御礼申し上げます。新年度の年会費の納入をお願いできましたらありがたく存じます。

Newsletter
Support21 Social Welfare Foundation
Vol.75 2024.3
社会福祉法人 さぽうと21
理事長　髙橋 敬子

社会福祉法人さぽうと２１は…

認定NPO法人難民を助ける会（AAR Japan）を母体に、その国内事業を受け継ぎ、社会福祉法人として1992年に設立されました。
日本で生活する難民やその家族、定住外国人などの相談に乗り、学業継続のための就学支援や学習支援など、自立を後押しする活動を行っております。

私たちの活動を応援してくださる方を求めています！

■会　員：法人会費50,000円／個人会費5,000円
■ご寄付：随時受付
■マンスリーサポーター：随時受付

詳しくはこちら➡

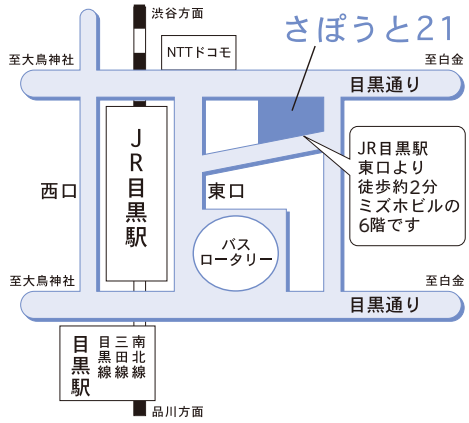
会費・ご寄付とも税法上の優遇措置が受けられます

◆会費・寄付のご送金口座◆

ゆうちょ銀行	振替口座：00180－7－25470 加入者名：社会福祉法人 さぽうと２１
	※通信欄に会費または寄付とご明記ください
三井住友銀行	目黒支店(普) 851872 名 義：社会福祉法人 さぽうとにじゅういち
みずほ銀行	目黒支店(普) 1180279 名 義：社会福祉法人 さぽうとにじゅういち
三菱UFJ銀行	目黒駅前支店(普) 1390060 名 義：社会福祉法人 さぽうとにじゅういち
	※銀行振込み後は事務局までご一報ください

お問い合わせ

社会福祉法人 さぽうと21

住所：
〒141-0021
東京都品川区上大崎2-12-2ミズホビル6階

TEL：03-5449-1331
FAX：03-5449-1332
E-mail：info@support21.or.jp
URL：http://www.support21.or.jp